

中学校の国語教材を利用した書写の実践を考える

相奈良 公仁子

はじめに

中学校における国語教育の中で、「書写」の指導に配当する授業時数は、第一学年及び第二学年では年間二十単位時間程度、第三学年では年間十単位時間程度が求められている(『中学校学習指導要領』平成二十年三月告示 平成二十二年十一月一部改正 文部科学省)。とはいえ、通常の授業の中に、これだけの時間を割くことは容易でなく、夏休みや冬休みの宿題になる可能性が考えられる。その際、国語の教科書ではなく、書写の教科書に従って習うことから、国語の授業の中にあっても別に捉えられてしまいそうである。

「書写」は、『中学校学習指導要領』の「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の中に、

(1) 「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」の指導を通して、次の事項について指導する。

ア 伝統的な言語文化に関する事項

イ 言葉の特徴やきまりに関する事項

ウ 漢字に関する事項

と並んで、

(2) 書写に関する事項について指導する。

と位置づけられている。「話す」「聞く」「読む」とともに、「書く」とも関連する知識と技能の養成を担う。一体感をもった学習が求められると考えている。ここでは、国語の授業の中で学習した内容を、書写の教材に活用することを検討する。現在の書写の教科書でも一部では実践されているが、検討の余地は大きい。国語の学習で得た知識を、書写を通

じて効果的に表現することを目指したい。

具体的には、「書写」が「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」中に位置づけられていることを加味して、古典作品を対象とする教材の実践例を考える。特に和歌の教材化を試みる。

和歌の学習の中心は、三年生に位置づけられている。受験を控えて、入学試験に出題されることも少なく、積極的に扱われにくい側面をもっているのではないかと考えている。読むだけではなく、書くことを通じて学習の機会を増やしたい。また、和歌の限られた字数は、書写の中でも配列等を学習するのに効果的な教材だといえる。

本稿では、光村図書『国語3』と『中学書写 一・二・三年』を考察の対象として具体的な可能性を検討する。

一、指導要領と教科書の内容

中学校の書写の学習は、『中学校学習指導要領』を開くと、

〔第一学年〕

ア 字形を整え、文字の大きさ、配列などについて理解して、楷書かひで書くこと。

イ 漢字の行書の基礎的な書き方を理解して書くこと。

〔第二学年〕

ア 漢字の行書とそれに調和した仮名の書き方を理解して、読みやすく速く書くこと。

イ 目的や必要に応じて、楷書かひ又は行書を選んで書くこと。

〔第三学年〕

ア 身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと。

が求められている。平成十年の同指導要領が、第二学年と第三学年の学習に、

ア 字形、文字の大きさ、配列・配置などに配慮し、目的や必要に応じて調和よく書くこと。

イ 漢字の楷書や行書とそれらに調和した仮名の書き方を理解して書くとともに、読みやすく速く書くこと。

を求めている内容と比較すると、文字の持つ効果への理解の充実が求められている。

光村図書の『中学書写 一・二・三年』は、これらの求めに、

一年生

1 楷書の書き方を確かめよう

2 楷書に仮名を交えて書こう

3 行書の書き方を学ぼう

二年生

1 行書の書き方を学ぼう

2 行書に仮名を交えて書こう

3 楷書か行書を選択して書こう

三年生

1 目的に応じて効果的に書こう

2 学習したことを生かして書こう

と応じている。平成二十年の指導要領が示す変化は、三年生の「1目的に応じて効果的に書こう」に認められる。本稿は、これに次いで記される「2学習したことを生かして書こう」の内容に即した教材作成の可能性を検討する。

二、国語の教科書に見出される書写教材

書写の教材化を目指す和歌は、『国語3』の目次に、

5 いにしえの心と語らう

古文・音読 音読を楽しもう 古今和歌集 仮名序

古文 君待つと——万葉・古今・新古今

と示されている。

「古今和歌集 仮名序」を開くと、上段に毛筆で記され、下段には同じ内容が活字で記されている。音読教材として準備されたもののだが、書写の視点からは、同じ内容がどうして毛筆と活字で併記されているのかを生徒たちに尋ねることが出来る。その際は、上段の毛筆が楷書ではなく、行書で書かれている効果も問いたい。上段の毛筆は古典の雰囲気を良く表し、下段の活字の方が文字としては読みやすい。毛筆は、楷書より行書で書かれている方が文字に連続があり、どこことなく優雅でみよびな雰囲気を感じられるような答えが返ってくるのではないだろうか。

次ページ以降には、カラー写真で典籍が掲示されているところが注目される。「六歌仙図」（土佐光起）と「色紙帖」（本阿弥光悦筆／伝俵屋宗達 絵）の中に書が記されている。読むことは難しいだろうが、線の太細や文字の大小、文字の配置によって、趣が変わることは容易に感じられる。

「君待つと——万葉・古今・新古今」には、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の典拠所に写本の画像も掲示されている。教科書に活字で記された歌も、もとは筆で書かれている様子を確認することが出来る。国語一般の授業と書写の授業が、無縁でないことがよく示されている。書写の授業でも想起させたい教材になっている。

「君待つと——万葉・古今・新古今」に引用された歌を、一度に書写

教材と捉えるには多すぎる。今回は、『万葉集』から引用された次の歌を対象とする。

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山

東の野に炎の立つ見えてかへり見すれば月傾きぬ

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

天地の 分かれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河なる 富士の高嶺を 天の原 振り放け見れば 渡る日の 影も隠らひ 照る月の 光も見えず 白雲も い行きはばかり 時じくそ 雪は降りける 語り継ぎ 言ひ継ぎ行かむ 富士の高嶺は

反歌

田子の浦うち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ

多摩川にさらす手作りさらさら何そこの児のここだ愛しき

父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぜ忘れかねつる

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

これらの中で、特に、持統天皇の「春過ぎて夏来るらし」の歌は、書写の『中学書写 一・二・三年』にも、二年生の学習の「コラム 季節のしおり2」に、硬筆の行書を書く教材として引用されている。二年生には意味もよくわからないままに書写していた歌が、三年生には内容も含

めて復習することができる。

以下には、この歌を一枚の半紙の中に毛筆で書き上げることと課題とする。二年生に硬筆で書いた歌を、三年生は毛筆で書くことで、「2 学習したことを生かして書こう」に示された「三年間のまとめ」の課題を作成する。

三、【楷書】の復習

春過ぎて夏来るらし白たへの衣干したり天の香具山

『中学書写 一・二・三年』は、二年生の硬筆学習の教材として、右の歌を掲出している。

1 行書の書き方を学ぼう

点画の省略

筆順の変化

行書の練習2

2 行書に仮名を交えて書こう

行書と仮名の調和

行書に調和する仮名

行書と仮名のまとめ

3 楷書か行書かを選択して書こう

楷書と行書の使い分け

と学び進めた後で、「コラム 季節のしおり2」の中に「季節の言葉を、書いて味わおう。」として、硬筆の行書を書く教材の一例としている。二年生では書写するだけであったが、三年生で内容を理解することで、より身近な教材として接することが可能になる。

この歌を「毛筆を使って、楷書と行書で書き分けてみよう。」を課題

としたい。復習の具体的な手続きは、『中学書写 一・二・三年』の三年生に準備された

2 学習したことを生かして書こう

三年間のまとめ

の「学習の窓」の図示された順番に従う。

「学習の窓」は、「書くときの基本」として「★書くときの姿勢」と「★筆記具の持ち方」にはじまる。次いで、「文字を整えて書く」の中に「★筆使い」の確認が求められている。ここからを具体的に振り返ってみよう。まず【楷書】の「漢字の筆使い」に留意して、指示のあった教科書の一〇ページを開くと、「地球」を教材にして、

★始筆・送筆・終筆のリズム

★筆圧

★点画のつながり

をポイントとした学習を求めている。復習としては、合わせて「点画の種類と筆使い」(六ページ)と「字形の整え方」(八ページ)に加えて、「漢字の字形」(二二ページ)の振り返りも求めたい。

教科書が教材とする「地球」を、本稿の場合は、課題とする歌から「春夏」に置き換えてみた。まず「春」を書くことによって、「横画」「縦画」「折れ」「左払い」「右払い」の復習が求められる。一例として、その筆使いを記してみると、「横画」



の始筆は、穂先を左上から紙面におろし、一度止めてから送筆する。筆の傾きが、始筆の角度になる。線の太さは、教科書にも記されているように、紙面に筆をおろした時の筆圧の加え方によって調整す

る。筆圧をあまり変化させずに、右方向へ送筆する。その際、穂先は横画の上側を通るようにし、穂先の向きを一定にする。終筆では筆を止めて、穂先を左上に突き戻すようにしてから、筆の腹から穂先の方へとゆっくり引き上げるように筆を紙面から離す。「縦画」においても、始筆、送筆、終筆の筆使いは基本的に同じである。始筆は穂先を左上から紙面

におろし一度止める。線の太さに応じて加えた筆圧を保ちながら下方向へ送筆し、終筆で筆を止めてからゆっくり紙面から離す。穂先の向きは一定にし、穂先は縦画の左側を通るようにする。「折れ」は、横画と縦画の二画からなる。基本的な筆使いは、横画と縦画と同じといえる。折れ部分で、横画の終筆がそのまま縦画の始筆となり、一度止める際に少し筆圧を加えて下方へと送筆する。穂先の通る位置は、横画部分では上側、縦画部分は左側になる。「左払い」の始筆は、穂先を左上から紙面におろし、一度止めてから左下方に向けて送筆する。穂先は線の上側、腹は下側を通るように意識し、終筆に向けて少しずつ筆圧を弱め、穂先をまとめながらゆっくりと払う。「右払い」の始筆は、紙面に穂先を軽くあてて、少しずつ筆圧を加えながら右下方へ送筆して止める。終筆は筆圧を少しずつ弱めながら、穂先をまとめないようにしてゆっくりと右方向へ払う。穂先は線の上側、腹が線の下側を通り、止めた時の穂先の向きに注意する。「春」「夏」のように一字の中で、「左払い」「右払い」が連続する場合は、そのつながりを意識する必要がある。

この他に、「点」は、「春過ぎて」の「過」の「一」にあるが、「右上払い」「曲がり」の復習までを視野に入れると、

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

に「花道」を書き、

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

に「秋風」等を書くことで実現する。



一二ページの「漢字の字形」は、「青葉」を教材にして、

★文字の外形と中心

★点画の組み立て方

★部分の組み立て方

の学習を求めている。「春夏」を教材視してみると、教科書が「★点画の組み立て方」の「点画の方向に注意」する指示はもちろん、「『横画』が幾つか並ぶときには、一画だけ長く書く」ことも「点や画の間は同じくらい空ける」ことも注意することができる。具体的には、「春」の場合、一画目から三画目の横画「三」は右上がりになるが、長さや方向に注意する必要がある。一画目は短めに仰ぐように、二画目は一画目より直線的に短めに、三画目は長めに伏すように書くことが求められる。四画目と五画目の払いの方を長くするように書く。折れは、「日」のように、横画より縦画が長い場合は、内側の角度はほぼ垂直に書く。「夏」の「目」部分も同様であるが、「春過」の「過」の「口」部分のように、横画より縦画が短い場合は、内側に向けてるように書く。「夏」は、横画がいくつか並ぶので一画目だけを長く、「目」部分は同じ間隔になるように書く。左払い、文字の中の位置によって長さや方向が変わるが、「夕」のように文字の下部に位置する場合は、二つ目の左払いの終筆を横に向けてるようにすると整えられる。「秋風」の「秋」にも、左払いの方向への注意を促すことができる。また、「春夏」の「日」「目」部分では、折れの終筆は最終画の横画より長く出るが、「過」の「口」部分

のように連続して書かれる場合は、最終画が受ける形となり、「筆順による画の接し方」の違いも確認することができる。「★文字の外形と中心」については、「春夏」に文字の中心を通る縦画はなく、横画の中央や左右の払いの接点や交点などを目安として中心をとらえていくことになる。「★部分の組み立て方」としては、「部分どうしの位置や大きさの関係」についての振り返りを求めたい。「春夏」に加えて、「秋風」「花道」等を書くことで、左右、上下、内外からなる文字の各部分の幅や高さ、線の方向や形の変化、中心のとり方を確認し、一文字の中における部分どうしとの関係について確認することができる。

【楷書】では、「漢字の筆使い」のほかに「平仮名の筆使いと字形」の復習が一四ページに求められている。教科書はそのポイントを「学習の窓」に、

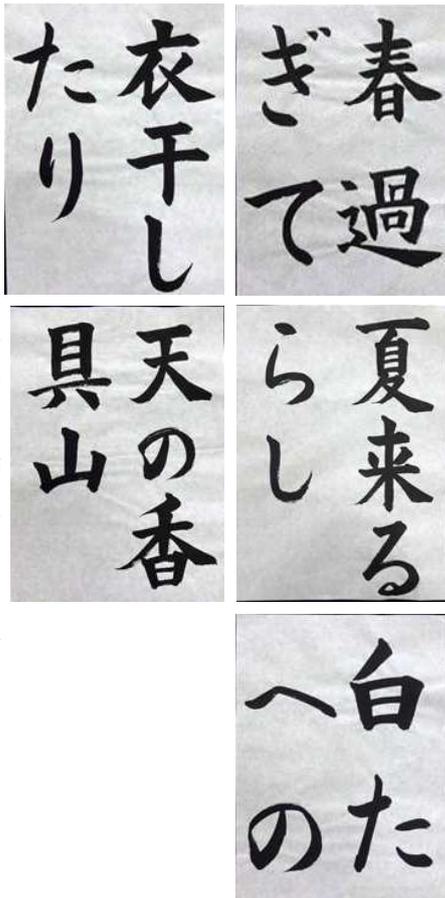
★柔らかな筆使い

★字形

と記している。「★柔らかな筆使い」は、指導書が示すように、楷書に調和する仮名について、楷書に比べて柔らかな筆使いを心がけ、始筆での穂先の角度も文字によって変えることが求められる。送筆は丸みをおびた部分が多く、やや曲線的になるのが特徴であり、終筆は漢字と同じように、止め、はね、払いがある。「春過ぎて」の「ぎ」や「白たへの」の「た」は、始筆の形と穂先の向きがそれぞれ異なる。「ぎ」「た」ともに三画目の終筆から四画目の始筆に向けて、点画のつながりを意識する必要はある。一五ページに示されている『結び』の書き方は、字源によって異なり、「夏来るらし」の「る」に「平結び」を振り返ることができ、「結び」は、穂先を少し浮かせるようにして方向を変え、筆の軸を回さず書くように注意が必要となる。「る」の折り返し部分では、一度筆を止めてから重ねるようにして方向を変える。また、「ら」

「し」や「天の香具山」の「の」には「曲がり」が認められる。大きく回る線を含む「の」の筆使いを練習するには好教材になる。★字形については、中心をとらえにくい文字が多い平仮名は、外形を把握して字形を整えることを意識する。

漢字と平仮名を交えて書くには、一六ページの「文字の大きさと配列」への振り返りも不可欠になる。教科書が「文や文章を書くとき」のポイントとして「学習の窓」に示す「★文字の大きさ」には、「仮名は漢字より小さく書く」ことが求められる。これまでの学習を振り返るという意味では、半紙には一首を次のように四く五文字で分けて書いた。大筆を用いて書くので、楷書と平仮名の筆使いと字形の特徴をあわせて確認することができる。



一六ページの「★配列」や「★用紙に対する文字の大きさ」については、これらを一枚の半紙に小筆を用いて書く中で振り返りを求めたい。和歌は長いと言われそうだが、教科書は一年生の教材として、

目には青葉山ほととぎす初がつを
を課題に示している。三年生には、その応用として和歌の長さは、ささやかな挑戦になる。

四、【行書】の復習

教科書が求める「三年間のまとめ」には、「★筆使い」の【楷書】に続いて【行書】の復習が示されている。二三ページの「学習の窓」には、行書の特徴が、

★筆使いの特徴

- ・ 筆記具を滑らかに動かし、点画に丸みをもたせる。
- ・ 筆脈を意識する。
- ・ 一つの画の中で筆圧の変化に注意する。

★点画や筆順の特徴

- ・ 点画の方向や形の変化
- ・ 点画の連続
- ・ 点画の省略
- ・ 筆順の変化

と記されている。

楷書と比較できるように、ここでも「春夏」を漢字の課題とするところからはじめたい。前掲の楷書と比べると、「★筆使いの特徴」は、例えば、「春」の「三」や「夏」の「一」の横画は、始筆の角度がそれぞれに異なる。点画が丸みをおびていることと穂先の位置と向きに注意したい。送筆部分は線の太さが同じではなく、一面のなかで筆圧のかけ方が変化していることがみてとれる。「横画」は右上がりが強くなり、やや曲線的となる。終筆では、「春」の二画目と三画目のように次の画に向かう筆脈が表れることが多くなる。「春」の四画目の「左払い」は、始筆から少しずつ筆圧を弱めながら送筆し、終筆で穂先をまとめるようにして軽く止めて方向を変える。五画目の「右払い」の始筆は、穂先から軽く入り、少しずつ筆圧をかけながら送筆し止める。終筆の形の変化

に注意する。「日」部分の横画の連続は、三画目の終筆で一度筆を止めたと、穂先の弾力をそこなわないように方向を変える。四画目の始筆でも一度筆を止めて送筆する。「日」の一画目と二画目の始筆を空けて書くことと、「折れ」の丸みなど楷書との形の変化に注意したい。また、行書では筆脈を連続させるために、途中で墨をつけることなく一文字を書き上げたい。



★点画や筆順の特徴」は、二六ページの「点画の方向や形の変化」には「木立」が教材にされているが、「春夏」も「終筆の筆使いが、次の点画に移りやすいよう変化する」ことは復習可能である。「夏来るらし」の「来」は、縦画の終筆が「はね」のように変化する。二八ページの「点画の連続」については、教科書が「月光」を示している。ここには、「連続させる時の留意点として「春」が例示されている。「主な連続」として示された「筆脈が実線になる」ことは、「春」の「日」と「夏」の「目」部分においても、書いて確認することができる。「点画の方向や形が変化し、直接つながる」例としては、「夏」の七画目の横画から八画目の左払いへのつながりに顕著な例が見出される。八画目から九画目にも直接連続する箇所が認められる。「春過ぎて」歌の中では、「過」の「口」や「衣」にも見出される。点画が直接連続する際は、前の画と接する位置によって、折り返し部分の重なり具合が違うことをあわせて確認したい。

三四ページの「点画の省略」や三六ページの「筆順の変化」は、「春過ぎて」の歌で復習できるところはない。

君待つと我が恋ひ居れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

で、「秋風」の「禾」に「点画の省略」を書くことができる。

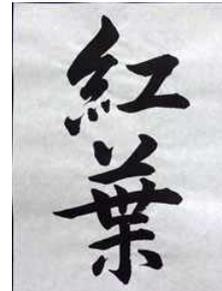
父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし言葉ぞ忘れかねつる

の「言葉」の「葉」の「世」部分に「点画の省略」、「サ」「世」部分に「筆順の変化」が認められる。

春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ

の「紅」の「糸」部分にも、「点画の省略」と「筆順の変化」を見出すことができる。ここでは教科書の「紅花」とは別に、「紅葉」の例を掲げておく。

指導書が示すように、行書を効率的に習得させるには、共通する部分の書き方を覚え、その部分をもつ漢字に応用させていく方法が有効である。楷書の点画と比較することで行書の特徴をつかみ、点画の方向や形の変化、連続や省略の仕方、筆順の変化を理解して、行書の部分の書き方を覚えていきたい。

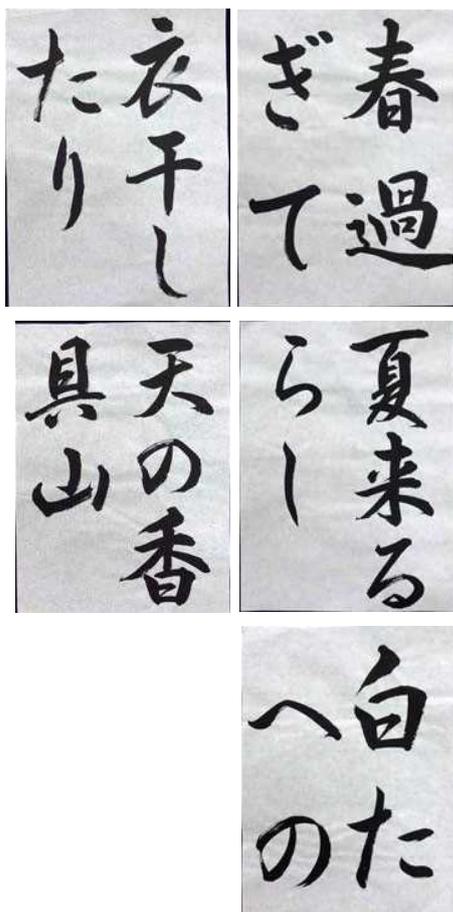


「行書と仮名の調和」については、指示のある四〇ページを開くと、「学習の窓【筆使いの特徴】」として、「く」を例に「画の中での筆圧の変化を意識し、軽やかに筆を運ぶ」ことが求められている。楷書の筆使いと比較すると、筆圧のかけ方に変化をつけることで、一画の中に太細の変化があり、やわらかい印象を受ける。「春過ぎて」歌の場合、「し」「り」に類似例を見出すことができる。「に」を用いて求められる「筆脈を意識し、次の画につながるように書く」ことは、「春過ぎて」歌の場合、「ぎ」「た」に類似例が求められる。筆脈は、行書に調和する仮

名では、実線化して表れる場合が多くなる。教科書が「鉛筆で……線をなぞり、筆脈を確かめよう」と示す「……」は、文字の中の点画のつながりのみでなく、次の文字へとつながる筆脈も記していることに注意したい。

四二ページの「行書に調和する仮名」を開くと、「行書に調和する仮名の筆使いに慣れよう」として、「の」「り」が連続する形で書かれている。どちらも、「春過ぎて」歌に用いられている平仮名である。大きく回る線、縦方向の線、横方向の線や折れなどが含まれる文字を書き進めるなかで、行書に調和する仮名の筆使いの特徴を学びたい。「学習の窓【主な変化】」に「いろは」を用いて示される「始筆や終筆の形が変化する」例は、「春過ぎて」歌の場合、「夏来るらし」の「らし」や「白たへの」の「への」の仮名の連続にも求めることができる。「点画が直接つながる」例は、「衣干したり」の「り」にて確認することができる。

課題とする歌を楷書と同じ要領で分割し、行書で次のように記した。



五、課題の仕上げ

教科書の五五ページの「文や文章を読みやすく書く」に示された一六ページを開くと、「学習の窓 文や文章を書くとき」のポイントとして、

★文字の大きさ

・仮名は漢字より小さく書く。

★配列

・行の中心をそろえる。

・字間と行間をそろえる。

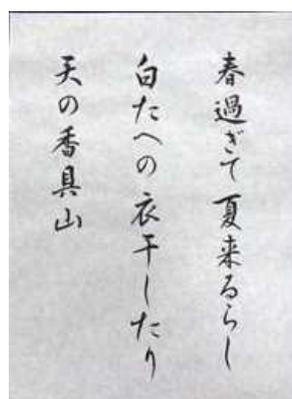
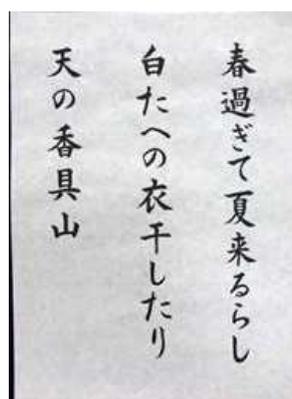
★用紙に対する文字の大きさ

・用紙の上下左右に余白を取る。

・用紙に合った文字の大きさを考える。

が記されている。

半紙に「春過ぎて」歌を書こうとすると、筆は小筆を使用することになる。試みに楷書と行書を次のように書いてみた。ここでは、読みやすく書くことを心がけた。指導書には、一字一字に気を取られすぎず、用紙全体に目配りをして書くことが示されている。俳句に比べると、和歌は長文だが、教科書に掲示された俳句と同じ形式に無理なく配列することができた。「★文字の大きさ」では、漢字を大きく、平仮名を小さめにするが、漢字の中でも画数の少ない「山」「干」「白」などは小さめに書く。「★配列」では、文字の中心を「行の中心にそろえる」ことを意識し、中心の目安となる点画がない文字は、その外形から中心の位置を見定めていくことになる。文字の一目目の始筆の位置を確認しながら、一文字ずつではなく、一行全体に目を向けながら書き進めた。「★用紙に対する文字の大きさ」では、紙面の上下左右に余白を取り、各行の行頭行尾をそろえることで読みやすい配列とした。



五〇ページの「1目的に応じて効果的に書こう」に目を向けると、「学習の窓 文字を効果的に使うために」には、

★活字 (ゴシック体)

★活字 (明朝体)

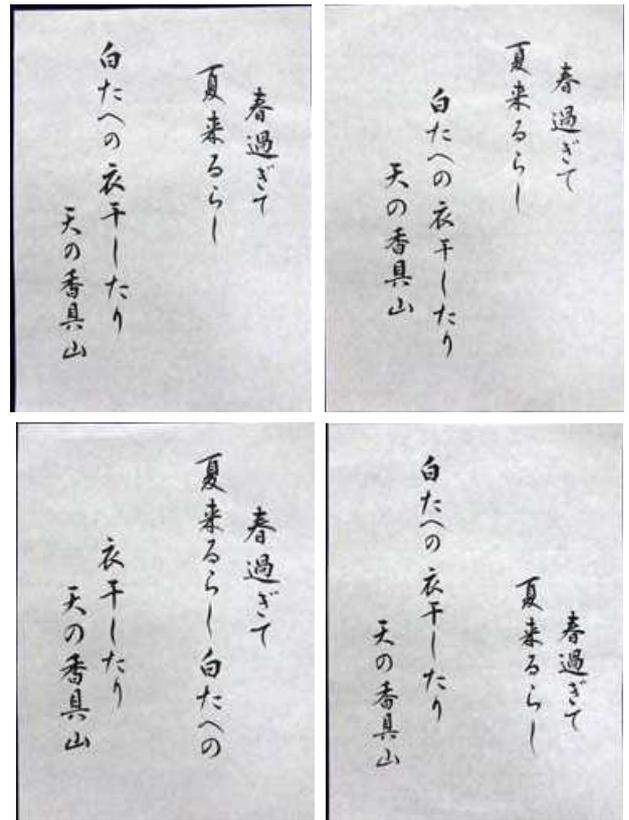
★手書き文字

と分類された中に、「★手書き文字」についての記述を見出すことができる。「★活字 (明朝体)」が「すっきりとして読みやすい。」と記す内容を、「★手書き文字」の中の楷書にもあてはめてみると、行書に比べて「すっきりとして読みやすい。」という声が聞かれるのではないだろうか。「★活字 (明朝体)」は、「★活字 (ゴシック体)」に比べると、線に太細があり楷書に近い。それでも、「★手書き文字」は、活字のようにすべてを同じように書くことはできないので、書いた作品を比べあうことによっては、「書き手によって異なる」ことや「書き手の思いや人柄が伝わりやすい」ことを確かめることができる。五八ページの「発展 先人の文字に学ぶ」を参考にすると、「書き手による違い」として、楷書の「道」と行書の「風」の文字が中国と日本の古典から掲載され、「同じ書体であっても、書き手によってさまざまな個性が見られる。」と記されている。本稿では「春夏」を用いて、同じ文字でも書き方によって雰囲気異なる様子を実践した。文字の外形のとり方、線の方向や長短、

太細、筆圧の強弱、運筆に緩急抑揚をつけて書くことで、同じ文字でも印象が変わることを伝えたい。



五二ページの「コラム デザインと文字」には、活字と手書き文字の効果を書いてある。手書きに「書体や字形、配列や筆記用具などによって、読者に与える印象は全く違ってきます。」と記された内容を応用して「春過ぎて」歌を次のように行書で書いた。前掲の行頭行尾をそろえて書いた行書きの場合と比較しながら、感じる違いを話し合ってみよう。散らし書きは、中学校の書写に必要なといわれるかもしれないが、五二ページの下段の「広告と文字」に注意すると、広告の中の筆文字は、文字の大きさや配置等に変化をつけて効果的に使用している様子を確かめることができる。『中学書写 一・二・三年』の最後には、「コラム 手書きの力」に谷川俊太郎の筆書きが掲載されている。中学校での書写の学習は、高等学校の「書道」の授業への入り口をも示唆することが求められることを考えると、積極的な試みも必要なのではないかと考えている。



代わりに

書写の学習は、国語の一般的な学習と教科書も異なり区別されてしま
いそうだが、「話す」「聞く」「読む」ことに対して、「書く」ことも一
体感をもった学習の可能性を探った。光村図書『国語3』の和歌の学習
ページには、書写の授業にも有効な資料の掲示が認められた。「君待つ
と——万葉・古今・新古」から万葉歌を利用して、『中学書写 一・二・
三年』『2学習したことを生かして書こう』の「三年間のまとめ」とし
て、「春過ぎて」歌を、楷書と行書で書くことを課題とした。

『中学書写 一・二・三年』には二年生配当で、既に同歌が課題とし
て提示されている。本稿は、硬筆で課題化されている教材を、毛筆の教
材にも用いたことになる。内容は三年生に学ぶことになるので、読むこ

とに合わせて、書くことの復習教材に適していると考えた。教科書の「三
年間のまとめ」に指示された内容に従って、楷書の漢字から漢字仮名交
じりへの復習を行い、行書にも同様の復習が可能となる教材になり得る。
「活字」と比較してみても、書写は単なる「手書き」の位置にとどま
るような存在ではない。一点一画をおろそかにすることなく書くことを
身につけることで、それぞれの文字の特徴を知ることにつながる。
配列等に注意して書くことで、その表現の幅も大きく広がりもする。
中学校において書くことの基礎をしっかりと復習することで、高等学校の
「書道」教育へとつなぐことのできる課題の作成を試行した。